

神を捨て、神になった男

確定死刑囚・袴田巖

第1回……

新連載

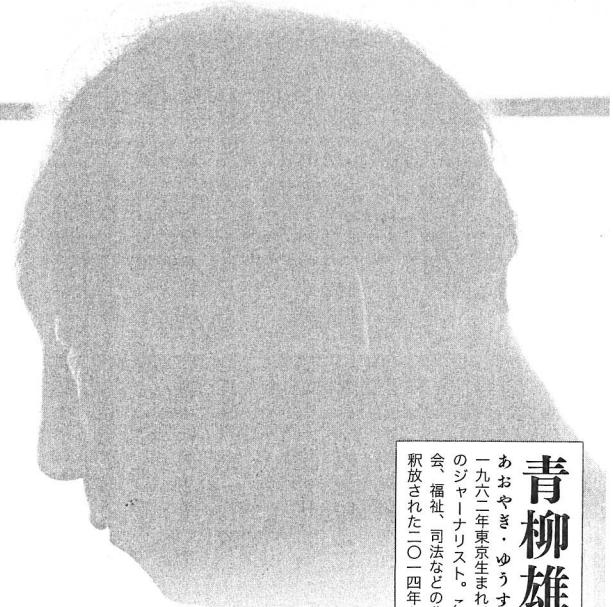
「袴田事件なんか最初からないんだ」

半世紀のうちに、世相は変わった。

二〇一六年六月三〇日、午前九時すぎ。

静岡県浜松市の繁華街を、老齢の男性がゆっくりと歩を進めていた。梅雨の合間に強い日差しが、グレーのハットとシャツに降り注ぐ。気温は連日上昇を続け、この日は三〇度を超えた。男はやや前傾姿勢を保ち、表情をほとんど変えない。首を下に傾け、靴の先を見つめるようにして四時間半歩き続けた。途中で何度も人差し指と親指で作った輪やVサインを虚空に向けて差し出す。「宇宙の彼方と手を上げて応える男がいまだに「確定死刑囚」の立場のままであることは知らない人が多い。死刑囚が人混みをすり抜けていく。

ちょうど五〇年前、一九六六年六月三〇日。静岡県清水市（現静岡市清水区）で、みそ製造会社専務宅が放火され、焼け跡から一家四人の他殺体が発見された。容疑者は当時三〇歳の従業員で、元プロボ



青柳雄介【文・写真】

あおやぎ・ゆうすけ
一九六二年東京生まれ。雑誌記者を経てフリーのジャーナリスト。これまで事件を中心に社会、福祉、司法などの分野を取材。袴田巖氏が釈放された二〇一四年から密着取材を続ける。

世界 SEKAI 2017.1

拘留生活という大きな犠牲の上で、私は何を得ようとしているのか。私は今、人間としてすべての欲望を抑え、そして代わりにそれとは比べものにならない程の大きな満足感を得ようとしているのだ。（中略）

さて、私も冤罪ながら死刑囚。全身にしみわたって来る悲しみにたえつつ、生きなければならない。そして死刑執行という未知のものに対するはてしない恐怖が、私の心をたどえようもなく冷たくする時がある。そして全身が冬の木枯におそれたように、身をふるわせるのである。自分の五感さえ信じられないほどの恐ろしい瞬間があるので。しかし、私は勝つのだ。私は、今日、自分の生活に対する決意と行為が、一つなりとも卵を持って石に投げつけるに等しい無謀なものだとは思わない。（一九七三年一月二六日、袴田巖から兄・茂治あて書簡より）

定し、その瞬間から、宿痾のように袴田の精神は蝕まれていったのか。ごく近い未来、不本意ながらにも生命は国家権力によって断ち切られてしまう。

一般的に刑務所や拘置所に長期間拘留されると、拘禁反応といわれるノイローゼになることが多い。拘置所の医務官として勤務した経験がある精神科医で作家の加賀エ彦は、著書『死刑囚の記録』でこう指摘している。

「不斷に死とむかいあつてゐる死刑囚は、死について考へないようによることばかりでした。でも、死刑が確定してしばらく経つたときの面会で、怯えたような顔をして『隣の房の人が、みなさんお元気でと挨拶し刑場へ消えてしまった……』と言い、あとは言葉になりませんでした」

その後、頻繁に送っていた手紙が途絶えるようになつた。「私は袴田巖ではなく神。姉なんかいない。帰つてもらつてく神。姉なんかいない。帰つてもらつてくれ」と、面会を拒むようになつたのもそのころだ。捏造された証拠で死刑が確定してしまつた。身近な死刑囚が処刑されていく。強引な死が迫つてくる恐怖と諦念。神は存在しなかつた。ならば自分が神になり、近い将来にやつてくる死に打ち克とう。自分を保ち死に抗う方法は、

これしかなかつた。神にならなければならない理由があつたのだ。

神になつた瞬間から、人間としての記憶は曖昧になつた。失くしてしまつたのかもしれない。あるいは、どこかに存在してはいるのだが、一六〇セントあまり

の小さな体の奥深くへ意図的にしまいこんでしまい、もはや自ら取り出すことが困難になってしまったのか。ひとつだけ確かなことは、記憶を取り出す必要がこれまでまったくなかつたということだ。自分を保つために、人間を超越する。己のアイデンティティを確認するために神になる。そうしなければ、自分の存在が消されてしまうからである。

二〇一四年三月 第二次再審請求審で静岡地裁は画期的な判断を下す。再審の開始と、死刑および拘置の執行停止を決定したのだ。地裁は「捜査機関が重要な証拠を捏造した疑いがあり、犯人と認めることは合理的な疑いが残る」「拘置の続行は耐え難いほど正義に反する」と、強く指弾した。後に詳述するが、これに対

の国もあつてね。死にやせんようになつてゐる。そういうことを信じにやいかんだな。こいつを殺しちゃ世の中困るんだ死にやせん。死なん保障がされている。これが中心なんだ。言えばわかる。反対すれば神がつぶれちゃうと思つているんだな。人間がね。ばい菌をもつて反対してきたんだね。それが間違つてゐる。第一、糞を焼くなんて。あんな物いらんだ世界で。地球がもたん。反対になつてき

人知を超えた神（眞実）に嘘について

嘘をついたとしても神はお見通しだから
無駄なこと。間違っていたと早く認める
べきだ。人間がばい菌という名の嘘で神
を攻撃しても、神は死なないが、あまり
にも嘘が多い世の中になると、地球は間
違いなく破滅への道を歩んでしまう——
大胆な意訳を試みると、こんな感じだろ
うか。続けてこんなことも言つた。

「袴田巖が糞を焼く機械を発明して、浜松で展示まして、糞を焼く時代にし

し検察側は即時抗告し、現在、東京高裁と検察、弁護団の三者協議が続いている。再審開始のめどはまだ立っていない。し

かし、故郷に戻った袴田は、そんなことには無関心のようだった。

「神の国の儀式があつて、袴田巖は勝つた。無罪で勝利した。袴田巖の名において。その袴田巖は去年まで存在したが、

「仕事の邪魔をせんしてくれ」
自白の強要、証拠のでっち上げ、でたらめな調書、すべてが嘘だという。これは拘禁反応が出る前から一貫して主張していることである。

の喫茶店へ出かけた袴田は饒舌だった。

だということ。神が、何でもできる神ができなくなつちやう。国民がいっぱい反対してたんじやね。そういう筋道を神が通そうとしているんだね。反対できるの、お前の筋道はねえござる。三番目

が、お前の価値はねえんだから、全勝で勝った神だから。反対していた事を間違つてたと認めなきい。儀式が終わって、だんだんなくなってきた。神を殺そうと

してゐる者はなくなつてきた。現実にね。
無駄なことなんだ。神は死にやせん。靈

もあるともされていたように、記憶が曖昧な部分は確かにある。しかし、「精神的な収容所」のような拘置所から釈放後の一、二年あまりを敬意を持って丹念に追つていくと、彼の言葉の行間からは人間としての真実が滲み出しているのではないか、そう思えるようになった。

袴田は、受け入れられない過酷な現実を、自分の精神を神に変換することで咀嚼してきた。棘に満ちた困難な現実を乗り越えるための物語化である。

身に覚えのない罪で有罪とされ、場合

によつては命を奪われる。耐え難いほど
の恐怖だが、そうしたことが実際にこの
法治国家では起り得る。袴田の軌跡を
丁寧に追ついくことで、事件の背後に
潜む現代社会の病巣が浮かび上がつてく
るのではないだろうか。

名を着せられ、四八年間拘禁され続けた
袴田巖の物語である。彼はどのようにし
て神になり、何を成し遂げようとしてい
るのだろうか。